

小田原史談

第62号

談会一内
原内館6
田城化
小市文
所原土
發行田郷

年頭のことば

小田原市長 中井 一郎



新年あけましてお目出と
うございます。

皆様のご健康を心から祝
福申し上げます。

小田原史談会が発足して
からはやくも十七年目を迎

え、益々ご発展しつつあり
ますことを心からお慶び申

し上げます。その間におけ
る会員各位の文化財保護、

その他各地の史跡の探究や
歴史の研究活動等の業績に

ついては、私が今更申しの
べるまでもなく多大なもの

があり敬服いたす次第であ
ります。

私は市長就任とともに市

所で古きをたずねて新しき
を知るよう心新たにしてい

十七万市民の生活文化向上
のため大いに努力する覚悟

でありますからよろしくご
協力くださいますようお願い

年頭のあいさつ

会長 中野 敬次郎



明けましてお目出度う存
じます。旧年中は皆様に種

々ご厄介をかけたが、
本年も相変らずご援助、ご

協力下さいまして、吾等の
小田原史談会を一層発展さ

せて頂きますようお願い申
し上げます。

「故紙に堆れる中に歳の
過ぐることを強し、猶お余す

筆削の志偏長し、東窓風を
払って初日を迎う、読み起

宸題

北村 宏

千山輝初旭。万岳白雪新
神州満正氣。妓迎聖代春
壬子歳旦 流霞
市内城山3-1-22

繰り返してゆくのでありま
しょうが、私達の小田原史
談会の歩みもこの域外では
ないようです。しかしその
中に徐々に進歩をとげて行
くのでありましょう。新年
の心は有難き哉。
さてまた、次のような古
人の感慨もあります。
「辰日春を尋ねて春を見
ず、芒鞋して踏み沈し瓊頭
の雲、帰りに来つて却つて梅
花の下を過ぐれば、春は枝
頭に在つて己に十分なり」
春はここにあり。
正月には亭主はうちの女房
にほれるといひます。正月
に女房が久し振に着飾つて
奇麗にしているから許りで
なくて、年中仕事にまげて
走り廻つて、家の中のこと
を落着いて見たり考えたり
するひまもなかったが、正
月は静かに家の中にいて、
女房の立居振舞を見ている
と、そのやさしい心根や、
心尽しが今更のようにしみ
じみと感ぜられて、自分に
はこの女房が第一の人だと
惚れる気持ちにもなるのであ
りましょう。
幸福はここに有り。
私達の小田原史談会も、
この庭前の梅花一枝、正月
に亭主に惚れられる女房の

歳始賦

清水専吉郎

晨天新年梅花開
去亥来子千支改
流水不止八十二
輪廻転生毎日拜
昭和壬子元旦

賀正

- 会長 中野敬次郎
- 副会長 香川 政治
- 山崎 益太郎
- 松本 孝作
- 専門部 一同
- 企画部 一同
- 編集部 一同
- 理事 一同

光海出現永塚観音

内田 武雄

昔こうみのほとりに貧しい農夫があつて常日頃から人間は善いことをすれば善い報いが来る悪いことをすれば悪い報いが廻ってくるという仏教の説く因果の道理を固く信じて厚く三宝、

お前がここで御像の光を拝したのはいかに深い縁があつたからであろう。私もお前のためにこの御像が沈んだ所を知らしてやりに来なさい。私が一本の白羽の矢を放つたら其矢の落ちた所を索りなさい。

お堂は文政中災にかかり堂舎一時に灰燼となりぬ貧僧多年再建の道をはかると云えども微力にして及びがたく空しくこれまで心魂をつ

いやすと云えども建立の効さりにたす。今度多くの信仰の方々の寄進の力を得て此志を遂げることの出来た事はお観音様信仰の方々の慈心を垂れたまはる徳なるべし

皇朝の末期関東にも各地に豪族の蜂起するや社人曾我氏勢を曾我山陽の地に養い早川の土肥一族と共に源頼朝の幕下に武勇を知られた。祐信に養われた十郎祐成五郎時政の仇を報ずるや頼朝は満江御前に莊園を与へた程である。

松に契りてさける藤波朝庫右京は袖ふれし春や昔の花の香もわするばかりに咲ける藤波とあり北条の若侍達が遊山に来た事を物語って居るのである。

(仏法僧)を敬って毎日々々観音の御名を唱えていました、ところが第九十七代

「これは支那から渡って来た青色陶器で出来ている尊像で馬郎婦観音と言うのである」と教えてくれました

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

明けて御目出度う御座います。さて新春になると何と云つても餅を頂かなくては春の気分がしない。餅は古名は餅飯(もちい)と云つたと。餅は表面は真白で純粋である。餅は練りにねつてあるので、非常に粘り強い。餅は噛めばかむ程味がある。餅はまた甚だ調和性がある。塩味のおそうじに入れても云うに云われぬ、味が出ても更においしくなる。おしるこにすれば、甘味を一つ休みして、また甘味を増すような気がする。阿部川餅も他に追従を許さない、其他大福餅、柏餅も思い出した丈けでも、いな。餅は実に不思議な存在である。

曾我の里

神保栄

曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

老人が現われてお告になるのに「昔永仁元年四月頃」(九十二代伏見天皇の御代一二九三)大地震が起つてこの付近の家などは悉く倒れ山や谷などから水がどんどんわき出て自然とこしみと呼ばれる水海になってしまった。

観音の御像も其時水底に沈んで数十年もそのままになってしまった。しかるに今

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

観音の御像も其時水底に沈んで数十年もそのままになってしまった。しかるに今

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

明けて御目出度う御座います。さて新春になると何と云つても餅を頂かなくては春の気分がしない。餅は古名は餅飯(もちい)と云つたと。餅は表面は真白で純粋である。餅は練りにねつてあるので、非常に粘り強い。餅は噛めばかむ程味がある。餅はまた甚だ調和性がある。塩味のおそうじに入れても云うに云われぬ、味が出ても更においしくなる。おしるこにすれば、甘味を一つ休みして、また甘味を増すような気がする。阿部川餅も他に追従を許さない、其他大福餅、柏餅も思い出した丈けでも、いな。餅は実に不思議な存在である。

観音の御像も其時水底に沈んで数十年もそのままになってしまった。しかるに今

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

明けて御目出度う御座います。さて新春になると何と云つても餅を頂かなくては春の気分がしない。餅は古名は餅飯(もちい)と云つたと。餅は表面は真白で純粋である。餅は練りにねつてあるので、非常に粘り強い。餅は噛めばかむ程味がある。餅はまた甚だ調和性がある。塩味のおそうじに入れても云うに云われぬ、味が出ても更においしくなる。おしるこにすれば、甘味を一つ休みして、また甘味を増すような気がする。阿部川餅も他に追従を許さない、其他大福餅、柏餅も思い出した丈けでも、いな。餅は実に不思議な存在である。

観音の御像も其時水底に沈んで数十年もそのままになってしまった。しかるに今

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

明けて御目出度う御座います。さて新春になると何と云つても餅を頂かなくては春の気分がしない。餅は古名は餅飯(もちい)と云つたと。餅は表面は真白で純粋である。餅は練りにねつてあるので、非常に粘り強い。餅は噛めばかむ程味がある。餅はまた甚だ調和性がある。塩味のおそうじに入れても云うに云われぬ、味が出ても更においしくなる。おしるこにすれば、甘味を一つ休みして、また甘味を増すような気がする。阿部川餅も他に追従を許さない、其他大福餅、柏餅も思い出した丈けでも、いな。餅は実に不思議な存在である。

観音の御像も其時水底に沈んで数十年もそのままになってしまった。しかるに今

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

明けて御目出度う御座います。さて新春になると何と云つても餅を頂かなくては春の気分がしない。餅は古名は餅飯(もちい)と云つたと。餅は表面は真白で純粋である。餅は練りにねつてあるので、非常に粘り強い。餅は噛めばかむ程味がある。餅はまた甚だ調和性がある。塩味のおそうじに入れても云うに云われぬ、味が出ても更においしくなる。おしるこにすれば、甘味を一つ休みして、また甘味を増すような気がする。阿部川餅も他に追従を許さない、其他大福餅、柏餅も思い出した丈けでも、いな。餅は実に不思議な存在である。

観音の御像も其時水底に沈んで数十年もそのままになってしまった。しかるに今

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

明けて御目出度う御座います。さて新春になると何と云つても餅を頂かなくては春の気分がしない。餅は古名は餅飯(もちい)と云つたと。餅は表面は真白で純粋である。餅は練りにねつてあるので、非常に粘り強い。餅は噛めばかむ程味がある。餅はまた甚だ調和性がある。塩味のおそうじに入れても云うに云われぬ、味が出ても更においしくなる。おしるこにすれば、甘味を一つ休みして、また甘味を増すような気がする。阿部川餅も他に追従を許さない、其他大福餅、柏餅も思い出した丈けでも、いな。餅は実に不思議な存在である。

観音の御像も其時水底に沈んで数十年もそのままになってしまった。しかるに今

曾我谷津、曾我別所、曾我原、曾我岸、上曾我、大沢の六ヶ村を曾我の里と云うと新編相模風土記に書いてある。下曾我地区は昭和二十九年十二月一日小田原へ合併したがそれまでは足柄下郡に属し上曾我と大沢も三十一年小田原市へ合併したが足柄上郡であった。

箱根の天嶮により天孫民族の東撃を阻害したと云へ東国で大和朝廷文化を取り入れたのは足柄地方であった。曾我の里の各所より発見される先住民族の遺跡を見ればアイヌ式でわなく弥生式のものである。

宗我神社の社記によれば其祭神宗我部比古宗我部比売二柱の神は四道將軍に先立つて東国へ下向し足柄地方を開拓したと云われる。

奈良朝時代曾我の里は高屋の郷と共に(上府中)檀林皇后の御領地であった、従つて古来仏教が盛んで当地方の寺院には天台の流れ

明けて御目出度う御座います。さて新春になると何と云つても餅を頂かなくては春の気分がしない。餅は古名は餅飯(もちい)と云つたと。餅は表面は真白で純粋である。餅は練りにねつてあるので、非常に粘り強い。餅は噛めばかむ程味がある。餅はまた甚だ調和性がある。塩味のおそうじに入れても云うに云われぬ、味が出ても更においしくなる。おしるこにすれば、甘味を一つ休みして、また甘味を増すような気がする。阿部川餅も他に追従を許さない、其他大福餅、柏餅も思い出した丈けでも、いな。餅は実に不思議な存在である。

菊川周辺

酒匂郷土文化会

主筆 柏木次郎
 主査 川瀬春雄
 賛助 福谷安蔵

酒匂地区の西側を北面にかけて流れている小さな川がある。名前を菊川と言いつつ、下流の橋を「くろまま」橋と言っているがその名は昔楠木正成が名付けたと言われている。

その当時菊水川と言っている、確証はないがそういう伝説が長老達の間に伝えられている。又昔の印刷局病院の跡の裏手を流れている川に人が落ちると着物物の片袖を切って川に投げると人が助かると言ふ伝説もある。又此土地に古塚があり近所の人が掘ったら剣や骨董が出たとのことでしかし掘った祟りか、家族の者が病気になるなり又其の場所に葬った酒匂小学校裏の畑からも骨董や剣が出土し、これも又家族が病気になる基の位置に葬った、この所には小高い古塚があり今現在破損している。又酒匂神社はその昔今の御浜御殿屋敷跡附近に位置し、その場所から人々の乱流、洪水もあり神社

も破損の日は続きやむなく人柱立ちしていたが、無力な時代の文化にあつては大なる洪水を防ぐことさえ出来な状態であったため、今現在の位置に移つたという話で、又此近所は八丁河原と同様に洪水を物語っている、このそばに御浜御殿屋敷と称せられるものがあり、伝え聞く所によるとお浜御前が住み日を送つていら頼朝の実弟の義経公が鎌倉へ下りし時に休息した場所とも伝えられている。お浜御殿屋敷内を通つて小道は、酒匂川越えの際に歩いた道とも伝えられています。此道は酒匂町の裏道であり、国府津から飯泉観音へ通ずる順礼街道よりそれへ通ずる順礼街道よりそれ

い石橋と供養塔が実在している。伝え聞く所によると酒匂町の古道は神社、寺院を結ぶ様にそつて走り、凡らく石祖神類の場所を中心に曲りして一つの結ぶ交通網で

曾我の郎党鬼王団三郎

神保 西蔵

もあつた。石に見る年号は凡らく古い物と言う物はななく文化、弘化の間の年号である。以上諸伝説に致り歴史の一ページの裏を行く、かくれた歴史でもある。

昨年小田原史談会下曾我支部が結成された時先づ地元の史跡や曾我兄弟の研究をしようではないかと言つてみたものの特別資料がある訳でもなし中野先生や内田武雄氏が話されたこと以外に知ることができませんでした。

それでも太平記や日本跡大系等を読んでる間に曾我兄弟の郎党鬼王団三郎は四国伊予幡多郡明治村目黒の伊予幡多郡には曾我八幡社というが六社もあり、字和島日記には字和島市伊吹八幡の神木は曾我兄弟が植へてあり、岩に兄弟が馬を洗つた跡があり、とこなめに蹄の跡が残っていると記されています。

また旭村奈良の妙等寺の開祖理玉和尚が、鬼王団三郎もあつた。石に見る年号は凡らく古い物と言う物はななく文化、弘化の間の年号である。以上諸伝説に致り歴史の一ページの裏を行く、かくれた歴史でもある。台本を売っていたという。鬼王団三郎も此の松井田宿から旅立つて行つたではないか。鬼王兄弟は曾我へ来たとき兄は十五才、弟団三郎は八才といふから曾我兄弟が没した時はそれから十八年の後のことであり、其後三年の後に高野山に登つて七年といふから旅に出た時には鬼王四十三才、団三郎三十六才となることになる。それにしても太平記からすれば百十年余りも歩いたことになる。此様にして永い永い間放浪の旅を続け年老いて故郷の四国伊予明治村へ帰つて理玉和尚に逢ひ兄弟の同回を頼んだであらう。

曾我氏と伊予?

曾我太郎祐信が源義経に從つて屋島に平家を破つた折平忠度が自分の太刀を船中に置忘れたものを祐信が奪い頼朝に獻納した、其功に依つて四国伊予に一千貫の荘園を賜つた、後曾我山の相生松の登る中腹に在る祐信塔は伊予の人々が建てたと云い伝へている。

伊予と藤原氏

伊東氏の家系を見れば、鎌

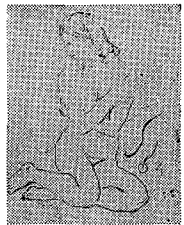
足一不比等一武智磨一九代略為憲よつて工藤と称す時理一時信一継永一維職に至りて伊豆の押領使となつて伊東郷に居り由つて伊東氏となす。維職の子維繼狩野九郎と称す。維繼即ち祐隆一祐家弟祐親、祐泰一兄祐成、弟時致であるが、維職が押領使として伊東に住した時以前に四国に何か関係があつて伊予の人々を多く連れて来たのではないかと思われ何故なら曾我兄弟が母と共に曾我へ来た其乳母が伊予局と讃岐局という四国に關係のある名前であるから此の点何とか知りたと思ふが私のような浅學者では何ともなりませんので先生方の御教えを願ひたいと思ひます。

会員の近況

郷土史研究の愛好者が小田原史談会並に各關係者の御支援と御協力によつて、昭和46年11月7日酒匂郷土文化会を発足させた。同会の代表川瀬春雄、副代表柏木次郎秘書、福谷安蔵次長。

文

芸



(田辺至画白画)

垂跡天満天神像に絵馬と和歌

清水専吉郎

菅原道真公、昌泰二年右大臣となり延喜元年大宰権師に左遷され、延喜三年五十九歳にて身まかられしを五百五十五年後の永祿四年十月作刻の天神像を四百〇八年後の昭和四十四年五月発見修復さる。

菅公のすがたをこゝに拝むなる天神山の梅の匂ひと
延喜元年九月十日菅原道真詠
去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断腸
恩賜御衣今在此 奉持毎日拜余香

東風ふかか匂ひおこせよ梅の花
あるじなしとて春なわすれそ
奉納 清水専吉郎

四百年古色の像は修まりて 天神祭に絵馬のかずかず
華麗なる厨子はそのまゝいまにあり
その永祿の昔もほゆる
切金光る笏せまりくる
まなこ張り白歯むすべる天神像
心なき人に折られし梅の花
なげきをとにも大宰府の月
梅の花道真公をしのぶなる
寒さに匂ほふその人のさま
そよ風に匂ひ来にけり梅の花
二歩にすぎ歩むにせまき六十段
天神山の春にさきだち
天神の加護を思ひつ石段を
昇る子供に学業すまむむ
十字町南の町とかわれども 天神山の横は巨木に

永々八百年古式豊かな

白髭神社奉射祭

小田原市橋地区にある白髭神社(中村秀男宮司)では一月九日、神社境内に於て文治五年以来永々八百年も続いた古式豊かな奉引の式を行ない、式の後杉山神社会教育課長を始め地元有志多数参加し直会に移り郷土史研究家竹見竜雄氏の奉射祭についての講演もあり、盛大な奉射祭が催された。

文治五己酉年今歳九月重陽日於神前始経営流鏝馬神事馬場使口或斯為天下泰平五穀成就也
文治六庚戌年白髭神社青陽日宝前献七種之粥射毘沙之的等口明且斯即為天長地久武運長榮諸人快樂也此日中村殿社参之次来臨能引坊尽日觀遊備珍味饗応為及脱而還千館

同社に蔵された古文書

(編集部)

隅田川七福神めぐり

三橋正四郎

江戸文化の最も華やかな文化文政の頃から武蔵国、下総国を通ずる隅田川の東岸に七福神が祀られてあり初春七草の間に寿福を祝い家門繁栄、家業隆盛を願う初参りが行事となっている今年一月五日県内老人クラブ連合会で昆沙門天の多門寺、寿老人の白鬚神社、福祿寿尊の百花園、弁財天の長命寺、布袋尊の弘福寺恵比寿大黒天の三冊神社など隅田川七福神めぐりが行われたが、この日我々も

(編集部員)

片浦支部便り

鈴木平八

昨秋片浦支部で「鎌倉史跡めぐり」を行なった。参加者43名同乗のバスは快適に湘南、ベイパスを行く途中の説明は馴れたガイドさんに「真白き富士の嶺みどりの江の島」とその歌も添えて七里ヶ浜の海は悲劇も忘れたかのように静かであった。新田義貞で名高い稲村ヶ崎を過ぎれば早鎌倉である、由比が浜のにぎわいは今はなく左に折れて先づは長谷観音へ、ここから中野先生の研究を積んだ説明が始まる、鎌倉宮、幕府跡、頼朝墓へこの人は何か私共に身近く感じ参加会員一同の身近にある鎌倉であるが、熱心なる中野先生の説明に深く感銘し、新しい知識を学び得て楽しくつづがなく帰路につききました。(諸般の事情から会報の発行が大変おくれしてしまい、この原稿が年を越してしまつたことを深くお詫び申上ります。編集部)

された。出品内容は江戸時代の名僧月舟禅師をはじめ担山禅師、秀岳和尚、西岡宜軒居士等々の名筆、宮部春虹画伯の日本画数十点、片野不空蔵氏の彫刻、郷土の異色作家牧雅雄氏の水墨画のたるま大幅等々が堂内の観覧者で賑わった。この催しは東泉院が自費で行ない入場は一切無料。一寺院でこの種の催しをしたのは恐らくはじめてではないかと思われるが、その趣旨について住職(史談会員岸師)は次のように語っている。

「レジャー時代の日本人は誰でもおいしい御馳走をたべ、きれいな着物をきています。しかしこれからは目のご馳走をとり、心の着物をきて栄養をとり、魂を豊かにしなければ新しい世界の日本人として成長しないでしょう。その料理をととのえ衣服を仕立てる役目こそお寺のやるべき大事な仕事だと思えます。いずれ機会をみて第二回を開きたいと思っています。」

東泉展盛況裡に

一月十五日久野東泉院で書画彫刻等の展覧会が開催